

ル・コルビュジェのナンジェセル＝エ＝コリのアパートマンにおける装飾（その1）：
もうひとつの「蜂窩」DÉCOR IN LE CORBUSIER'S NUNGESSER-ET-COLI APARTMENT (PART 1):
ANOTHER 'HONEYCOMB'千代 章一郎^{*1}

Shoichiro SENDAI

This paper analyses the conception process of Le Corbusier's apartment (1933) to reveal the realization or transformation of the 'honeycomb as volume' and the germination of the later 'honeycomb as frame'. Although the construction method followed the 'domino' of columns and slabs that enabled 'free planes', the vaulted roof on the top floor transformed it into a more fluid interior space with fewer partition walls, and the various rooms were softly divided by freestanding furniture and revolving doors. The freedom of such 'equipment' is one achievement of the 'honeycomb as a volume' rather than a 'dom-ino'.

Keywords : Le Corbusier, Decoration, Structure, Equipment, Nungesser-et-Coli

ル・コルビュジェ, 装飾, 架構, 装備, ナンジェセル＝エ＝コリ

1 はじめに

本稿は 20 世紀における「装飾」概念の変容を明らかにするために、対概念となる「構造」との関連から分析する論考の一部である。建築家ル・コルビュジェにおける「蜂窩 alvéole」という構造体は、鉄筋コンクリートの柱とスラブによって組み立てられる「ドミノ dom-ino」の構法とは異なって、鉄骨の柱・梁の線状部材を格子状に連結される。1940 年代、ル・コルビュジェはこの架構を「蜂窩」と呼び、特許として申請した^{注1)}。そしてル・コルビュジェは、この架構を適用した集合住宅をカプ＝マルタンで構想し、棚・卓・椅子の家具の「装備 équipement」を研究した。「ドミノ」に「装備」された家具は室内空間を分節する仕掛けであったが、それでも間仕切壁が支配的であった。一方、「蜂窩」による「装備」は、間仕切壁を最小限化するような新しい室内装飾であった^{注2)}。

しかし架構としての「蜂窩」は、(少なくとも呼称としては)はじめから最小限の線状部材による格子状の構造体ではなかった。1920 年代の早い時期、ル・コルビュジェは鉄筋コンクリート造の「ドミノ」による個人住宅を实践する傍ら、集合住宅への応用として「蜂窩状の団地」について説明している(図 1)。この「蜂窩」は「ドミノ」に積

み上げられた細胞(住戸)の一部を空中庭園とすることによってできる空隙があり、いわば庭園を内包する凹型ヴォリュームとしての「蜂窩」である。

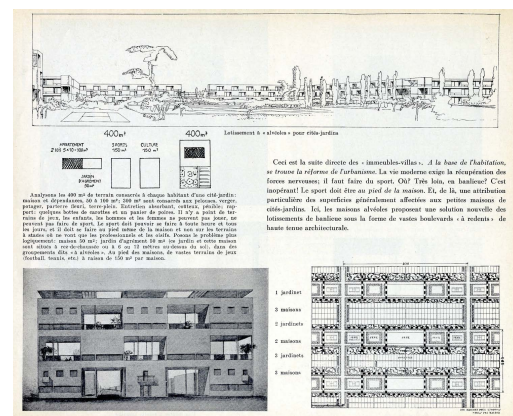


図 1 『全集』においてはじめて言及された「蜂窩」の構想：「ドミノ」を応用した田園都市構想(1922) ^{注3)}

^{*1} 島根大学学術研究院環境システム科学系 教授・博士(工学)

Prof., Academic Assembly, Institute of Environmental Systems Science, Shimane Univ., Dr.Eng.

この考え方は、ペサックに建設された鉄筋コンクリートの集合住宅（1925）の構想原理にもなり^{注4)}、凹型ヴォリュームとしての「蜂窩」がいくつかの住棟に実現されている^{注5)}。さらに 1928 年に始まるスイスの金属施工会社名にちなんだヴァネール計画において、鉄骨の凹型ヴォリュームとしての「蜂窩」がはじめて用いられ^{注6)}、ジュネーヴのクラルテ集合住宅（1932）にも適応された^{注7)}。最終的には、建設事業の縮小とそれに伴う床面積確保の必要性から、空中庭園となる凹型の空隙は充填され、構造躯体から張り出したバルコニーが住戸に取り付けられている^{注8)}。いわば凸型ヴォリュームとしての「蜂窩」である。

このクラルテ集合住宅と同時並行するかたちで、ル・コルビュジエはヴァネールと共同しながら、ル・コルビュジエ自身が入居することになるアパートマンをパリに構想する。つまり、ル・コルビュジエのパリのアパートマンの構想は、はじめからヴォリュームとしての「蜂窩」を原型としていた。

このアパートマンについては、概説書によって構想の全体像を知ることができるが^{注9)}、出版当時の資料の限界もあり断片的な考察にとどまっている。近年、本格的な修繕工事がル・コルビュジエ財団主導で実施されたことを契機に、最新の研究の成果を知ることができる^{注10)}。しかし修繕のための資料整理を目的とした研究であるために（とりわけ修繕の大きな課題であった外壁や、当時の工事業者との関係についての詳細な分析）、たとえば修繕に直接関係しない室内装飾、あるいは建設過程におけるル・コルビュジエの理念の変容や断念された構想について十分に分析されているわけではない。

いずれにしても、このアパートマンは特定の施主の与条件に基づいて構想された建築作品とは異なって、一貫した理論が見出しにくいことは、このアパートマンの最上階に、下階の住戸とは異なるル・コルビュジエの個人的な自邸があることも関係している^{注11)}。

そこで本稿では、ル・コルビュジエのナンジェセル＝エ＝コリのアパートマン（1933）を対象に、ヴォリュームとしての「蜂窩」の構想過程を分析することによって、その室内空間の生成と「装備 équipement」の特徴を明らかにしたい。

2 凹型ヴォリュームとしての「蜂窩」の反転

アパートマンはパリ郊外に隣接する緑豊かな敷地であり、ル・コルビュジエはもともとこの周辺の敷地に関心を持ち、いくつかの開発業者に集合住宅建設の事業を持ちかけて、そこに自邸を構えようとしていたようである。最終的に建設地となる敷地の南北側にもル・コルビュジエは集合住宅を構想しているが^{注12)}、この 3 ブロックの内、少なくとも南側のブロックには上階の屋上庭園に加えて凹型ヴォリュームとしての「蜂窩」である空中庭園、つまりヴァネール計画と同じ、ヴォリュームとしての「蜂窩」を採用している^{注13)}。

1931 年 3 月には、ブローニュの森に近いこの集合住宅に引越することを仄めかしているが^{注14)}、実際に開発業者から集合住宅建設事業の依頼があるのは 1931 年の 6 月である^{注15)}。最上階をル・コルビュジエ自身が購入、また他階の入居者の確保が条件であった。ル・コルビュジエはすぐさま事業を了承し、「パリで最も美しい敷地の一つ」^{注16)}に構想を開始する（図 2）。まだ架空の構想段階であり、詳細は不明であるが、少なくとも上層部の住戸には空中庭園が設けられている。



図 2 ル・コルビュジエによるアパートマンの最初の素描：右図は左図の部分拡大（1931 年 6 月 28 日）^{注17)}

事業が決定してから構想が本格する前、ル・コルビュジエはすぐさまフランソワ・ド・ピエールフやピエール・ヴィンテールなど、友人たちに手紙を書いて住戸の購入を提案している。下階の住戸は匿名の購入者を想定した構想ではなく、知人の個々の要求に応じた丁寧な対応が求められることがはじめて想定されていた。

全体のヴォリューム構成を検討した最初期の図面によれば、地上階を除く上階 10 層部分は、斜線制限によってセットバックした凹凸のあるヴォリュームとしての「蜂窩」を応用した「庭園付きの」住戸から構成されている^{注18)}（図 3）。

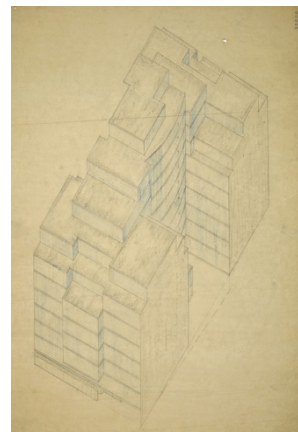


図 3 アパートマンの全体ヴォリュームの検討^{注19)}

ここでル・コルビュジエは、クラルテ集合住宅と同じ鉄骨構造を想定し、この集合住宅を施工したエドモンド・ヴァネールに技術協力を持ちかけている。

「私たちは図面の赤く示されている箇所に賃貸物件を建設する予定です。二棟目（黄色）と組み合わせてほしいという依頼を受けています。」

この土地は、パリで最も美しい土地のひとつです。第一期は基本的には決定しています。あなたの工法でつくってみたいと思いませんか。

最上階（8、9、10、11 階）には庭付きの高級アパートマン（そのうちの何戸かは私の顧客です）。その下には、大きな廊下を持つヴィラ棟（空中庭園なし）。

敷地は 4 8 24 31 A B。

もしあなたがこのプロジェクトに興味をお持ちなら、・・・大部分をあなたに任せたいと思っています。

建設の作業は素晴らしい地区で行われるのです。

私の手紙はまとまりがありませんが、ご興味がおありでしたらご連絡ください。そうすれば詳細をお知らせします。」^{注20)}

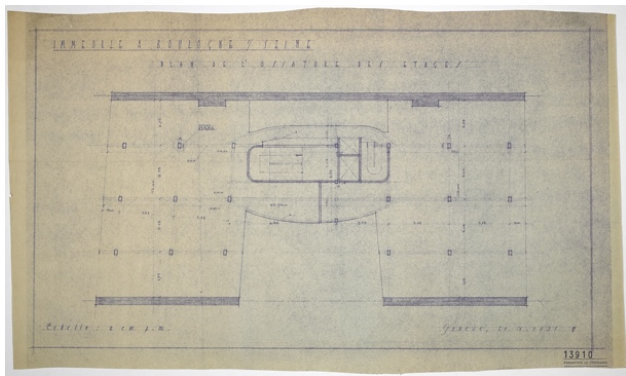


図4 ヴァネールによるアパートマンの構造提案図面^{注21)}

もちろんヴァネールは建設事業協力を承諾し、クラルテ集合住宅と同じ工法による建築図面を作成している。ヴァネールが作成した最初期の基本階の平面図では、境界壁に挟まれた内部は鉄骨がクラルテ集合住宅と同じ3m余りの間隔で整然と並んでいる（短手方向4スパン）^{注22)}（図4）。ヴァネールによる図面はあくまで基準階の構造的な検討であるが、ファサードの凹凸のヴォリュームは検討されていない。中央部分には、採光を兼ねた中庭が設けられた典型的なアパートマンの形式である。

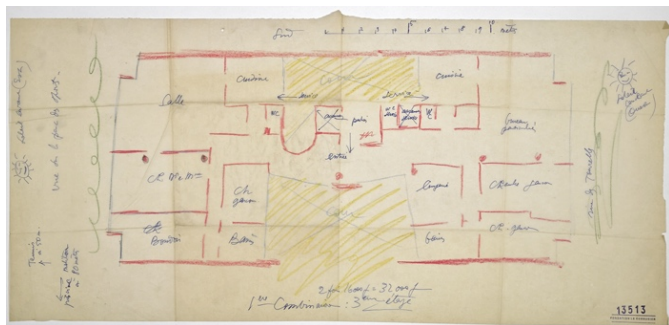


図5 ル・コルビュジエによるアパートマンの基準階平面図の素描^{注23)}

最終的には法規上の制限もあり、6層の売却物件とその上層にル・コルビュジエの自邸が想定されている^{注24)}。6層分の住戸に関しては、両側の通りに面したファサードは、凸型ヴォリュームのバルコニーもしくは出窓であり、上階がセットバックしているとはいえ、この時点では凹型の空中庭園は検討されていない^{注25)}。

ル・コルビュジエのアトリエでは、1931年7月から10月までに集中的に平面構成が検討されているが、ヴァネールの乾式工法は断念され、コンクリート柱を長軸中央に配し、より広い2スパンの柱間とし、両端の境界壁でスラブを支持する構造に方針を転換している^{注26)}（図5）。工法的にはパリの救世軍難民センター（1933）とほぼ同様である。最上階はともかく、下層の住戸をル・コルビュジエは知人たちに売却する責務を負っていた。標準的な基準階設計ではなく、施主の個性に応じたきめ細かな平面計画にするためには、柱間は少ない方が好都合である。空中庭園が設定されていないのも、やはり床面積の確保の必要もあり、ル・コルビュジエは柱とスラブによる「ドミノ」

によって自由な平面を実現する手法を選択したと考えられる。

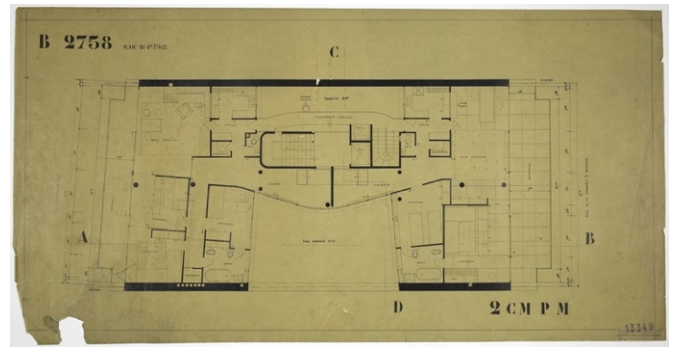


図6 アパートマンの基準階平面図：家具の配置^{注27)}

実際、ヴィラ・ベゾー（1920）にも認められる柱とスラブによってできる空間領域の等間隔性、そこに挿入される家具の「装備」という図式は、「ドミノ」の可能性の追求の延長線上にある^{注28)}（図6）。とりわけ1929年のサロン・ドートンヌの住宅展示空間に近似するその棚の構成は、ル・コルビュジエの所員シャルロット・ペリアンによる検討の結果である^{注29)}。

各階の詳細な平面計画においては、数多くの検討が行われ、風呂・個室の間仕切壁、及び台所の器具配置が細かく修正されているが、立面の検討については、ファサード面に間仕切壁が接していないために、室内構成とは切り離して検討することが可能になった。

ル・コルビュジエは、凸凹のヴォリュームを断念したかのような全面ガラス壁を最初に検討する。ル・コルビュジエはファサードの進化（水平横長窓から純粋なガラス壁面へ）を説明する過程で、パリのアパートマンについて言及している。

「使用者が「クラルテ」と命名したジュネーヴの集合住宅は、直感的にブリーズ・ソレイユの仕事に糸口をつけたのであった。床の図を描いていて、ガラス壁面から先のバルコニーとしてかなり先にまで伸ばし、1.50m先に手摺をつけた。これが一つの影をつくるが、さらに猛暑のときのためにバルコニーの手摺りのところに巻き簾をつけることによって冬の日当たりをよくし（水平に近い太陽）、夏の日差しを避ける（垂直に近い太陽）。

1932年のモリートル住宅では、全面ガラス張りにした。猛暑のころには暑いことは知っていたが、いいではないか！ パリの人たちはそのころにはヴァカンスに行ってしまう。十分な遮断は巻き簾を外側につければいい。意図的にそうしたわけではないが、内側につけることでファサードの品格を示す鉄とガラスによる比例の威厳を保った。」^{注30)}

鉄骨における平面計画でも、柱間に合わせた諸室の間仕切壁はガラス壁のファサードから後退することによって、立面は自ずと「ファサードの品格を示す鉄とガラスによる比例の威厳」のある構成となるはずである。コンクリート柱に変更されても、同じようなファサードの構成を踏襲し、やはり引き違いによって開閉可能な全面ガラス壁であり、地上層のナンジェセル＝エ＝コリ通り側の玄関部分のみ通し柱となる円柱が露出している^{注31)}。

しかし、ル・コルビュジエはすぐにバルコニーと出窓による比較的

多様性のある層の構成の検討を始め、バルコニーと室内化された出窓を組み合わせている^{注32)}。凹型の空中庭園とは対照的な凸型の出窓は、室内化された居間として食堂と連続している。ル・コルビュジェが出窓の形式を用いることは少ない。ブラネックス住宅（1927）において採用された出窓は街路への眺望のための仕掛けであったが、このアパートマンにおいては全面ガラスブロック（サン・ゴバン製）で覆われている^{注33)}。東側の主要道路であるナンジェセル＝エ＝コリ通りから見えるはずのパリへの景観は遮られ、もっぱら光のスクリーンを持つヴォリュームが凸型に突き出している^{注34)}。

いずれにしても、この出窓の形式はル・コルビュジェのこれまでの常套手段ではなかった^{注35)}。出窓ははじめ規則正しい市松模様であり、居住空間の構成との対応関係はなく、近隣のアパートマンのファサードとの連続性にもまったく配慮されていない。むしろ採光機能しかないガラスブロックとガラス壁との純粋な形式的対比が検討されている^{注36)}（図7）。その後、市松模様のファサードは法規上の問題（三層目以上からの張り出しの立面総面積の1/3制限）より控え目なファサード構成へと変化するが^{注37)}、各層にバルコニー・出窓のヴァリエーションをつくることによって個性を持たせている^{注38)}。

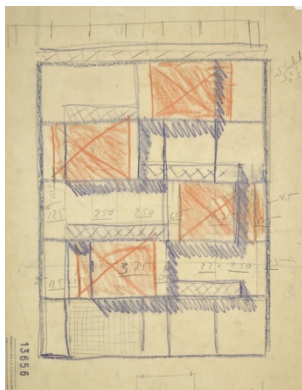


図7 ル・コルビュジェによるアパートマンのファサードの凸型ヴォリュームの検討^{注39)}

3 ヴォールト架構の出現

6層の住居部分のファサードが検討される一方で、その上層に想定されたル・コルビュジェの自邸については別途検討される。もともと、主要道路側（ナンジェセル＝エ＝コリ通り）の路上からできるだけ視認できないようなヴォリュームをル・コルビュジェが望んでいたのか、あるいは高さ規制や斜線制限のために結果的にそうなったのかは定かではないが^{注40)}、6層以上の建物に許容される容積を検討する段階で、東西に曲率の異なる二つの単純なヴォールト屋根が架けられて前面通りから後退している^{注41)}。

ヴァネールの集合住宅の構想においても、ヴォリュームとしての蜂窩による住戸の最上階にはヴォールト屋根が架けられていることから^{注42)}、ル・コルビュジェのアパートマンにも同じ手法が援用されたと考えることもできる。ヴァネールの最上階の住戸の構成は具体的に明らかではないが、おそらく原型となったのはボルドー近郊ベサックのフルージェス新地区（1925）のヴォールト屋根であり、本来凹型ヴォリュームとしての「蜂窩」のヴァリエーションであることがわかる^{注43)}（図8）。

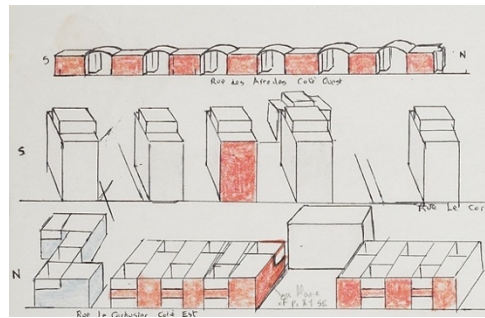


図8 ベサックのフルージェス新地区（1925）の様々な「蜂窩」形式：最上段はヴォールト屋根^{注44)}

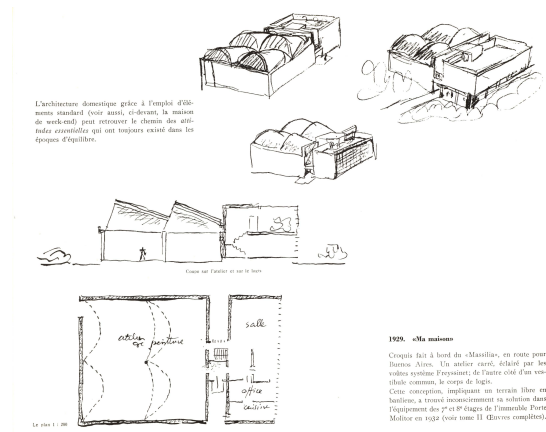


図9 『全集』に掲載されたル・コルビュジェの「私の家」（1929）の素描^{注45)}

ヴォールト屋根の出現には別の源流もある。ル・コルビュジェはラ・セール＝サン＝クルーの週末住宅（1935）を『全集』に掲載し、同時に「私の家」（1929）の素描を併載している^{注46)}（図9）。ウジェヌ・フレシネによるプレストレストコンクリートを用いたヴォールトの工法を採用したとしているが、やや特殊なヴォールトの架かる部屋は一層吹抜けの絵画制作のアトリエであり、4つの開口部から均一な光を取り入れる構想である。凹型の空中庭園を持つ二層の住空間部分と廊下部分によって分節され、ル・コルビュジェのアパートマンと同じ空間構成である。

ヴォールト屋根はモノル型住宅（1920）以来、ル・コルビュジェの探究してきた型であるが、芸術家の家（1922）においても、ヴォールト屋根からの採光が探究されている^{注47)}。ヴォールト屋根の一部を跳ね上げて天井採光とする形式であるが、実際のアトリエ住宅、例えばオザンファンのアトリエ（1922）などではヴォールト屋根ではなく、鋸型の屋根である。アトリエ以外の一般の住宅でも、断続的にヴォールト屋根の形式が探究され、アンフェルの週末住宅（1934）の構想でも書斎に光の筒を挿入したヴォールト屋根天井採光の試案もあった^{注48)}。

実際、ル・コルビュジェのアパートマンの構想初期のヴォールト屋根の検討においては、曲面はかなり多様な可能性が追求されている。

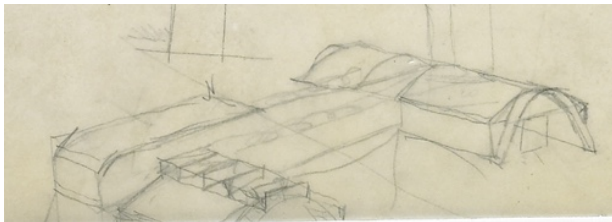
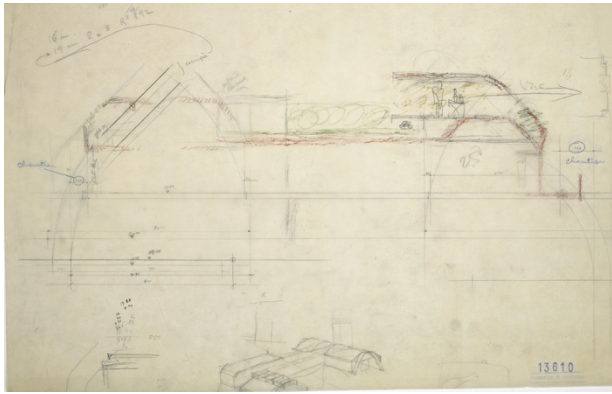


図 10 ル・コルビュジェによる東西に架かるヴォールト屋根の検討：下図は上図の部分拡大^{注49)}

まず東西に二つの大きなヴォールトが架かり、そこに中央に走る長方形のヴォリュームが貫入する空間構成が検討される^{注50)} (図 10)。ヴォールトはル・コルビュジェの住まいとなる 7 層目の床から立ち上がり、9 層目までの 3 層部分を占めていたが^{注51)} (図 11 の 1)、8 層目の上層のみにヴォールトが架かっている^{注52)} (図 11 の 2)。そして、おそらく規制の範囲内で最大限の容積を獲得するために、7 層目の床から立ち上がるヴォールトと 8 層目から立ち上がるヴォールトの二重構造に変化し^{注53)}、その後、7 層目の床から立ち上がるヴォールトの側面にガラスブロック壁面が取り付けられる^{注54)} (図 11 の 3)。

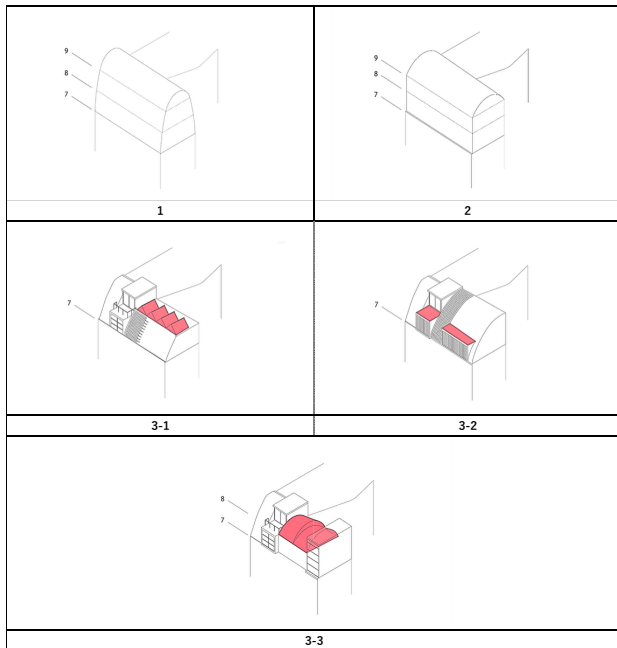


図 11 ヴォールト屋根の検討過程 (アトリエ側から)^{注55)}

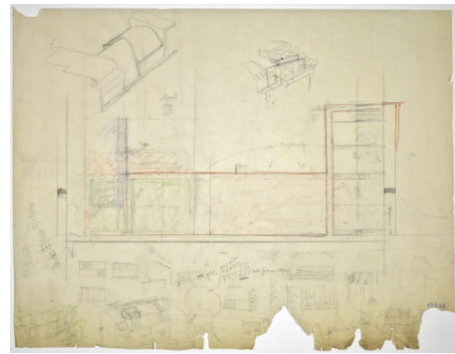


図 12 ル・コルビュジェによるアトリエに架かるヴォールト屋根の検討 (素描中央は東立面図)^{注56)}

アトリエ側のヴォールトはさらに複雑である。オザンファンのアトリエのような鋸屋根^{注57)} (図 11 の 3-1)、あるいは側面に開口部のある立方体^{注58)} が構想され (図 11 の 3-2)、さらに北側天井採光として「私の家」のようなヴォールト^{注59)} となる^{注60)} (図 11 の 3-3)。しかし最終的に、おそらく構造的な複雑さから、北側採光は断念される^{注61)} (図 12)

このような東西方向に架かるヴォールト屋根の検討は、東西に細長い敷地の斜線制限へ対応するためには合理的であるが、採光の時間変化が多少軽減される一般的なアトリエのような北側からの採光は得られない。したがって、アトリエには上部、側面から非常に複雑な光が入り込むことになった^{注62)}。たしかにアトリエとしては、理想の環境ではない。とりわけ絵画の制作の場合、光の変化は造形を正確に捉えることを妨げる。それでも、ル・コルビュジェは「私の家」のようににはならなかったアトリエの採光を肯定的に受容する。

「これがパラドックスの鍵なんです。これは絵画のアトリエなんです、私がいる 7 階の床に屋根をつけて、午前中に仕事をする絵画のアトリエを置こうとしたとき、敷地の方角の関係で北側採光が取れないことに気がつきました。街の規格上、頭上灯が禁止されているので、頭上灯のないアトリエをつくるつもりでしたが、代わりに地上から 2.20 メートルの高さの光を、アトリエに沿って片側 [東面] 12 メートル、もう片側 [北面] 7 メートルまで当てています。絵を描くにはひどい光になるだろうね。つねに変化するし、東から西になるし……。でも結局は絵を描くのに優れていると思うんです。カラヴァッジョ [光と影を追求したバロック画家] の北の鍵 [北側採光の秘密] とは違って、絵は千変万化の戦いをするのだからね。」^{注63)}

こうして、下階の住戸とは異なって、テラスもバルコニーも出窓もないナンジェッセール=エ=コリ側のアトリエは、半ば制御され、半ば制御されない室内空間として現象する。一定の採光のもとでじっくりと絵を描くことと、刻々と変化する自然の太陽光に苛まれながらイーゼルを立てて絵を描くことが同時に実現されている。

一方、上階にはファサード面から後退した位置に空中庭園が構想されている。いわば二つのヴォールト屋根に挟まれた凹型ヴォリュームの空中庭園であり^{注64)}、ヴォールトによるヴォリュームとしての「蜂窩」(図 8) の変形と考えることもできる (図 13)。こうしてル・コルビュジェは、はじめからの目的であったがどうかは定かではないに

でも、「手入れされた屋上庭園 *toit jardin surveillés*」に対する「野生のままの屋上庭園 *toit jardin laissé à l'état sauvage*」が実現することになった^{注65)}。

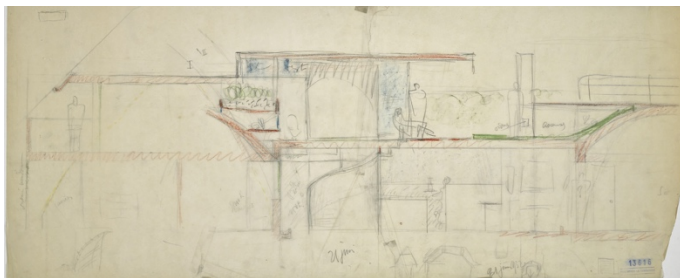


図 13 ル・コルビュジェによる屋上庭園の検討（1932 年 6 月 21 日）：下図は上図の部分拡大（中央が空中庭園）^{注66)}

ル・コルビュジェは入居後すぐに母親にこのアパートマンについて報告している。

「本当の心地よさです。

イヴォンヌとの心理戦に勝利。1 階 [地上階から 2 層目] のジュニーヴィント [東方への旅を共にしたリブシツツの友人] のところでおいしい昼食をとった後、彼女にはほとんどの（新しい）家具とカーテンを備えた完成したアパートマンを見てもらいました。彼女は驚き、喜んでいましたが、何も言わないふりをしたんです！ ブローニュに行くのははじめてでしたから。

アパートマンは申し分ありません。自分の建築に住むのは危険でしたが、本当に素晴らしい。建築的な戦略のおかげで、7 階や 8 階に建っている気もせず、田園風景を眺めることができます。眩暈することもあります。庭は詩のようです。芝生、ライラック、バラなど、そしてなんという地平線！

自慢の客室。母さんのために、でも落ち着くまで待っていてくださいね。」^{注67)}



図 14 植物の繁茂するル・コルビュジェの空中庭園^{注68)}

屋上のパラペットには緑の壁が立ち上がるように柵を設け^{注69)}、単なる屋上の庭園ではなく、緑に囲われた部屋のように植物が繁茂する

「避難所 *abris*」が実現された^{注70)}（図 14）。

しかしその一方で、アパートマンの竣工直後、ル・コルビュジェは下階の住人に対して、凸型のバルコニーに植物を置くことを禁じている。

「申し上げなければならないのですが、誠に遺憾ですがバルコニーに設置予定のプランターについての先日のお話に戻らなくてはなりません。このプランターは窓の足元、つまりバルコニーの床に設置するようにお願いします。

デュクロ夫人には、バルコニーに設置したプランターの撤去をお願いせざるを得ませんでした。ファサードの維持管理の問題です。花や緑は造形的な構成の一部であってはならず、ほとんどの規則では、このようなプランターの設置は多かれ少なかれ禁止されています。

このようなかたちであなたの計画を狂わせることによって申し訳ありませんが、物事を説明するのは遅すぎるより早すぎるほうが良いと思った次第です。」^{注71)}

主要道路の反対側のトンネル通りに面する自邸の居住空間のファサードにはバルコニーが張り出し、部分的に植栽が構想されているにもかかわらずである^{注72)}。こうしてル・コルビュジェは、凹型ヴォリュームとしての「蜂窩」を一方では光溢れるアトリエにし、もう一方では植物の繁茂する空中庭園として慎重に囲い込んだ^{注73)}。

4 「装備」の自立化

凹型のヴォリュームとしての「蜂窩」の痕跡が色濃く残るル・コルビュジェの自邸の平面構成も、「ドミノ」の架構とは異なる「装備」の手法へと変化していく。

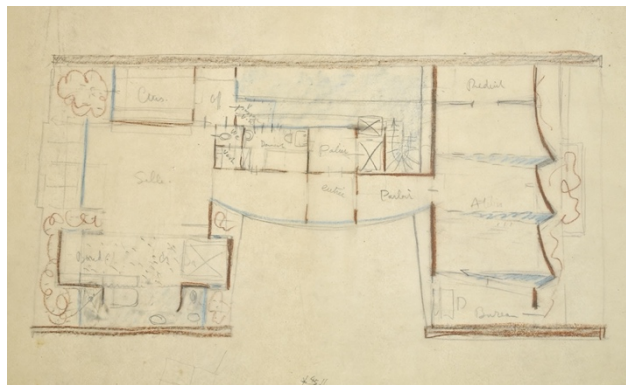


図 15 ル・コルビュジェによる自邸の室内装飾の初期検討（後に東西配置が逆転するが、初期構想では図左の東側が居間、西側がアトリエ）^{注74)}

最初期のル・コルビュジェの素描によれば、ル・コルビュジェの自邸は中庭のある廊下を挟んで東西に寝食の場と制作の場に二分され、玄関を除く廊下部分がお互いの前室となっている。室内の採光は対照的であり、居間や台所はバルコニーから太陽光が水平に入り、アトリエは天井採光である。ル・コルビュジェによる平面構成の検討では、アトリエには書斎が割り当てられているものの書き込みが少ない一方、婦人室（寝室）と台所には家具や衛生機器が書き込まれ、妻イヴォンヌに対する配慮が優っている（図 15）。

実際、最も多くの素描や図面が残るのは、婦人室である。浴槽、シャワー室、便器 2 器、洗面台 2 台、がさまざまな組み合わせられる。寝台とははじめ間仕切壁と棚によって分節されていたが^{注75)}、最終的には衛生機器の間仕切壁は最小限に切り詰められ、より開放的な空間構成となる^{注76)}。

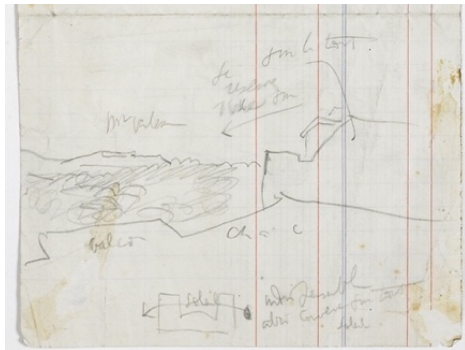


図 16 ル・コルビュジェによる寝室からの眺望の素描^{注77)}

その寝室については、寝台がかなりの高さにまで引き上げられる^{注78)}。ル・コルビュジェのペリアンへの指示であったが^{注79)}、トゥルネル通り側の郊外へのシームレスな牧歌的眺望を求めたためであったと思われる^{注80)} (図 16)。

一方、婦人室と寝室の反対端、中央の居間を挟んだ台所については、婦人室などと同時期もしくはやや遅れて検討が始まっているが、ル・コルビュジェ自身による検討は婦人室に比べると少なく、ほとんどがペリアンに委ねられている。ル・コルビュジェの検討では居間とは間仕切壁で隔てられた伝統的な台所であり^{注81)}、最終的にも、間仕切壁に立ち上がる自立型の棚が閉じた台所を構成している^{注82)}。ル・コルビュジェにとって、台所だけは女性の聖域として開放されることはなかった。

アトリエと居住空間を結ぶ廊下部分は単なる前室ではなく暖炉のある独立した空間として位置付けられている^{注83)}。廊下の玄関部分には二つの片開き扉が装備され、寝食の場と制作の場が隔離されていたが、二つの扉は回転扉へと変更される^{注84)}。扉であることには変わらないが、廊下の開放性、言い換えればアトリエ、廊下、居間の連続性が演出されている^{注85)}。また、はじめこの廊下部分に装備されていた自立型の棚も^{注86)}、すぐに廃案となり、代わりに壁面にニッチが装備され、アトリエから居住空間まで、回転扉以外は視線を遮るものは何も無くなる^{注87)}。こうした室内の「装備」は、「ドミノ」の構造であるにもかかわらず、空間的分節よりも空間の解放のための仕掛けとして機能している。

5 おわりに

1931 年から 1932 年にかけて比較的短期間に検討されたル・コルビュジェによるアパルトマンは、パリ市とブローニュ市にまたがっているために許可申請が遅れ、経済不況が重なって 1934 年になって竣工した。

太陽・広がり・緑の都市空間にふさわしい集合住宅として、ル・コルビュジェが以前から研究してきたのは凹型ヴォリュームとしての「蜂窩」であり、鉄筋コンクリートから鉄骨へと発展していった。パリのアパルトマンもその延長線に構想され、当初は鉄骨の骨組みが選

択されたが、住戸の多様性を確保するために柱間を広げる検討をする過程において鉄筋コンクリート造の「ドミノ」構法へ変更され、アパルトマン全体のファサードも床面積を確保するために凸型ヴォリュームの出窓やバルコニーが取り付けられ、凹型ヴォリュームはヴォールト屋根の架かる最上階のル・コルビュジェの自邸にその痕跡を残すことになった。

構造は「自由な平面」を可能にする柱とスラブの「ドミノ」を踏襲しているとはいえ、最上階に庭園が付随する大きなヴォールト屋根を架けることによって、間仕切壁や空間を分節する棚が少ないより流動性の高い内部空間に変わり、回転扉によって諸室が柔らかく分節される。それは、ヴォリュームとしての「蜂窩」のひとつの到達点であり、後に「架構」としての装備へとつながっていったと考えられる。

本稿は科学研究費助成事業基盤研究 (C) (一般) 課題番号 22K04509 の研究成果の一部である。

凡例

FLC: ル・コルビュジェ財団図面

AFLC: ル・コルビュジェ財団文書

参考文献

- 1) 千代章一郎、「カプ＝マルタンに構想されたル・コルビュジェの架構と装飾その 1: 「蜂窩」の誕生とそのプロトタイプ生成」、日本建築学会計画系論文集、第 88 巻、第 806 号、pp.1455-1464、2023 年 4 月、DOI <https://doi.org/10.3130/aija.88.1455> (in Japanese)
- Sendai, S: Structure and Decoration Conceived by Le Corbusier in Cap-Martin Part 1: The Birth of the 'Honeycomb' and the Generation of its Prototype, Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ), Vol.88, No.806, pp.1455-1464, 2023.4., DOI <https://doi.org/10.3130/aija.88.1455>
- 2) 千代章一郎、「カプ＝マルタンに構想されたル・コルビュジェの架構と装飾その 2: 「蜂窩」の崩壊、あるいは環境の装飾」、日本建築学会計画系論文集、第 88 巻、第 807 号、pp.1806-1815、2023 年 5 月、DOI <https://doi.org/10.3130/aija.88.1806> (in Japanese)
- Sendai, S: Structure and Decoration Conceived by Le Corbusier in Cap-Martin Part 2 The Collapse of the 'Honeycomb' or Environmental Decoration, Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ), Vol.88, No.807, pp.1806-1815, 2023.5., DOI <https://doi.org/10.3130/aija.88.1806>
- 3) Le Corbusier et Jeanneret, P.: *Œuvre complète 1910-1929*, Girsberger, Zürich, 1930 (in French)
- Le Corbusier et Jeanneret, P.: *Complete Work 1910-1929*, Girsberger, Zürich, 1930
- 4) Carl, P.: *Le Corbusier's Penthouse in Paris, 24 Rue Nungesser-et-Coli*, Daidalos, 28, 1988
- 5) Samuel, F.: *Le Corbusier, Architecte and Feminist*, Wiley-Academy, Chichester, 2004
- 6) Gargiani R. and Rosellini, A. tr. Piccolo, S.: *Le Corbusier, Béton Brut and Ineffable Space*, 1940-1965, EPFL Presse, Routledge, New York, 2011
- 7) Dumont, M.-J.: *Commentaire: Immeuble Porte Molitor - Rue Nungesser & Coli, Le Corbusier PLANS*, volume 5, echelle-1, Tokyo, 2005
- 8) Samuel, F.: *Le Corbusier and the Architectural Promenade*, Birkhäuser, Basel, 2010
- 9) Perriand, C.: *Une vie de création*, Éditions Odile Jacob, Paris, 1998 (in French)
- Perriand, C.: *A Life of Creation*, Odile Jacob Editions, Paris, 1998
- 10) Le Corbusier et Jeanneret, P.: *Œuvre complète 1929-1934*, Girsberger,

Zürich, 1934 (in French)
Le Corbusier et Jeanneret, P.: *Complete Work 1929-1934*, Girsberger, Zürich, 1934
11) Nivet, S.: *Le Corbusier et l'immeuble-villas*, Mardaga, 2011 (in French)
Nivet, S.: *Le Corbusier and l'immeuble-villas*, Mardaga, 2011
12) Le Corbusier et Jeanneret, P.: *Œuvre complète 1934-1938*, Girsberger, Zürich, 1938 (in French)
Le Corbusier et Jeanneret, P.: Le Corbusier et Pierre Jeanneret, *Complete Work 1934-1938*, Girsberger, Zürich, 1938
13) Le Corbusier et Jeanneret, P.: *Œuvre complète 1938-1946*, Girsberger, Zürich, 1946 (in French)
Le Corbusier et Jeanneret, P.: *Complete Work 1938-1946*, Girsberger,

注

*引用はすべて原文のまま。但し、イタリックは手書き、[] は筆者による補注。

- 注1) cf., AFLC, T2-7-51, 52, Brevet N°1.029.744 - 15/12/1950, délivré le 11/03/1953, publié le 05/06/1953.
注2) cf., 千代章一郎、「カプ＝マルタンに構想されたル・コルビュジェの架構と装飾 その1:「蜂窩」の誕生とそのプロトタイプの生成」、日本建築学会計画系論文集、第88巻、第806号、2023年4月、pp.1455-1464、DOI <https://doi.org/10.3130/aيجا.88.1455> ; 千代章一郎、「カプ＝マルタンに構想されたル・コルビュジェの架構と装飾 その2:「蜂窩」の崩壊、あるいは環境の装飾」、日本建築学会計画系論文集、第88巻、第807号、2023年5月、pp.1806-1815、DOI <https://doi.org/10.3130/aيجا.88.1806>.
注3) 図版出典: Le Corbusier et Pierre Jeanneret, W. Boesiger et O. Stonorov éd., *Œuvre complète 1910-1929*, Girsberger, Zürich, 1930, p.76
注4) cf., Le Corbusier et Pierre Jeanneret, W. Boesiger et O. Stonorov éd., *Œuvre complète 1910-1929*, Girsberger, Zürich, 1930, p.77.
注5) ex., FLC19814B; FLC19894; FLC19895; FLC19900; FLC19953; FLC30549D; FLC30627.
注6) ex., FLC8649; FLC8657; FLC8732; FLC8829; FLC8688.
注7) ex., FLC29825; FLC22845; FLC8689; FLC9184.
注8) ル・コルビュジェはラルテ集合住宅において、空中庭園ではなく張り出しのバルコニーになった理由を暗に述べている。
「テラス [バルコニーのこと]。建物の蓋はすべての家において気晴らしと健康のためにこのうえない場所としなければならない。しかし法規は目を光らせている。法規は制限高で監視し、有効に使用する企画を禁じてしまい、そうでなければ誠に残念な無駄な費用を使う。法的規制は木構造に由来するのだが、いつになったらなくなってくれるのだろう。これこそ古い建築工法の最も馬鹿げた残滓である。」
« La couverture des bâtiments devrait constituer le terrain par excellence de délassement et d'hygiène de toute maison. Mais les règlements veillent : les gabarits montent la garde, interdisent de prendre les initiatives utiles ou alors entraînent à des dépenses fâcheuses. Quand la réglementation des gabarits, qui puise son origine dans la charpente de bois, cessera-t-elle enfin ? C'est l'un des plus grotesques résidus des méthodes anciennes de construire. » (Le Corbusier et Pierre Jeanneret, W. Boesiger éd., *Œuvre complète 1929-1934*, Girsberger, Zürich, 1934, p.67)
注9) cf., Jaques Sbriglio, *Immeuble 24 N.C. et appartement Le Corbusier*, Fondation Le Corbusier, Paris, Birkhäuser, Basel, 1996.
注10) cf., Franz Graf et Giulia Marino, *1931-2014, Les multiples vies de l'appartement-Atelier Le Corbusier*, Presses polytechniques et universitaires romandes, Lausanne, 2017.
注11) 先行研究は、ル・コルビュジェの自邸にあたる最上階の屋上庭園 (cf., Peter Carl, *Le Corbusier's Penthouse in Paris, 24 Rue Nungesser-et-Coli*, Daidalos, 28, 1988, pp.65-75; Flora Samuel, *Le Corbusier, Architecte and Feminist*, Wiley-Academy, Chichester, 2004, pp.143-149; Roberto Gargiani and Anna Rosellini, tr. Stephen Piccolo, *Le Corbusier, Béton Brut and Ineffable Space*, 1940-1965, EPFL Presse, Routledge, New York, 2011)、そして芸術制作のアトリエ (cf., Marie-Jeanne Dumont, Commentaire: Immeuble Porte Molitor - Rue Nungesser & Coli, *Le Corbusier PLANS*, volume 5, echelle-1, Tokyo, 2005; Flora Samuel, *Le Corbusier and the Architectural Promenade*, Birkhäuser, Basel, 2010, pp.129-143) の二つの場所に断片的に言及しているが、自邸全体を総体として論じているわけでは

Zürich, 1946
14) Le Corbusier: *Le Corbusier Carnets 1 1914-1948*, Fondation Le Corbusier, Paris, The Architectural History Foundation, New York, Éditions Herscher / Dessain et Tolra, Paris, 1981 (in French)
Le Corbusier: *Le Corbusier Sketchbooks 1 1914-1948*, Le Corbusier Foundation, Paris, The Architectural History Foundation, New York, Éditions Herscher / Dessain et Tolra, Paris, 1981

ない。

- 注12) cf., AFLC, H2-7-141.
注13) cf., FLC18480.
注14) cf., AFLC, lettre de Le Corbusier à sa mère, 1931.3.10.
注15) cf., AFLC, H2-2-509, 1931.6.28.
注16) « l'un des plus beaux terrains de Paris » (AFLC, H2-7-141, 1931.6.28)
注17) 図版出典: AFLC, H2-7-141, 1931.6.28.
注18) cf., FLC13608; FLC13494; FLC13829; FLC13555.
注19) 図版出典: FLC13608.
注20) « Nous allons construire un immeuble locatif à l'endroit représenté en rouge sur plan. On nous demande de le combiner avec un second (en jaune).

C'est l'un des plus beaux terrains de Paris. La première tranche est traitée en principe. Voudriez-vous le réaliser avec vous procédés.

Voyez le schéma de grande coupe: Nous aurions en haut (étages 8.9.10.11) des appartements de grand luxe avec jardins (j'ai des clients pour une partie) Au dessous seraient des tranches d'immeubles villas (sans jardin suspendu) avec grands corridors.

Le terrain est de 4 8 24 31 A B

Si vous voulez vous intéresser à cette affaire, ... vous pourriez en exécuter une grande partie. La démonstration se fait dans un quartier admirable.

Ma lettre est très décousue. Dites moi seulement si vous avez à cela un intérêt (par retour de courrier). Je vous donnerai alors des précisions. »

(Lettre de Le Corbusier à Edmond Wanner à Genève, 21 juillet 1931, AFLC, H2-2-513)

注21) 図版出典: FLC, 13910.

注22) cf., FLC, 13910; FLC13881, FLC32080. 梁を示す断面図が残されていないために、このような短い柱間で柱を置いた理由は定かではないが、柱と梁をアーク溶接するという当時としては新しい技術を用いていたためと思われる。

注23) 図版出典: [Le Corbusier], FLC13513.

注24) cf., FLC13911; FLC13337; FLC13339; FLC13394.

注25) 1900年代以降、パリの集合住宅では採光の観点から温室、ベランダ、出窓が都市法規上認可されるようになったことと関係している。cf., Soline Nivet, *Le Corbusier et l'immeuble-villas*, Mardaga, 2011.

注26) cf., [Le Corbusier], FLC13497, [Le Corbusier], FLC13513; [Le Corbusier], FLC13514.

注27) 図版出典: [Le Corbusier], FLC13349.

注28) cf., FLC13881; FLC13465; FLC13349.

注29) cf., [Charlotte Perriand], FLC13843; [Charlotte Perriand], FLC8378; [Charlotte Perriand], FLC13667; [Charlotte Perriand], FLC13594; [Charlotte Perriand], FLC13668. ペリアンによる証言については、cf., Charlotte Perriand, *Une vie de création*, Éditions Odile Jacob, Paris, 1998, pp.55-56. しかしペリアンは、秘密裏の内容が多かったためか、詳細を語っていない。

注30) « Mais dans l'immeuble « Clarté » de Genève, baptisé ainsi par les usagers, nous avons amorcé instinctivement des travaux d'approche vers le brise-soleil. Je dessine les planchers, ils se prolongent au-delà du pan de verre par un balcon d'une assez forte saillie de 1,50 m muni de son parapet. Une première ombre était provoquée; on y ajouta pour la canicule le

complément de volets roulants installés au droit des parapets des balcons, créant ainsi des conditions très satisfaisantes d'admission du soleil en hiver (soleil bas sur l'horizon) et d'obstacle au soleil en été (soleil haut sur l'horizon).

En 1932, l'immeuble de Molitor comportait une façade de verre intégrale; nous savions qu'il y ferait chaud à la canicule, mais baste! les Parisiens prennent leurs vacances à cette époque. Un barrage sérieux aurait été dressé par des volets roulants Installés à l'extérieur de la façade. Il n'en fut pas fait ainsi volontairement; les volets roulants furent installés à l'intérieur, maintenant ainsi la façade dans sa précise proportion de fer et de glace, lui assurant sa dignité: » (Le Corbusier, W. Boesiger éd., *Œuvre complète 1938-1946*, Girsberger, Zürich, 1946, p.104)

注31) cf., FLC13539; FLC13472; FLC13505; FLC13489; FLC1347313538; FLC13710; FLC13708; 13474; FLC13709.

注32) cf., FLC13348; FLC13349; FLC13350; FLC13465; FLC13319; FLC13359; FLC13358; FLC 13329; FLC13343.

注33) ガラスブロック壁はスイス学生会館（1932）の廊下部分に採用された形式であり、ビエール・シャローが建設したばかりのガラスの家に用いたのと同じサン・ゴパンの製品であった。シャローの参照が指摘されることも多いが（cf., Marie-Jeanne Dumont, Commentaire: Immeuble Porte Molitor - Rue Nungesser & Coli, *Le Corbusier PLANS*, volume 5, echelle-1, Tokyo, 2005）、少なくともル・コルビュジエもペリアンもこの点については触れていない。ル・コルビュジエのアトリエから程近いガラスの家の建設現場を見たとしても、このアパートマンの境界壁の素材感を生かそうとしていたル・コルビュジエにとって、透明なガラスのみが素材の選択肢ではなかったことはたしかである。

注34) パリのベイステギのアパートマン（1931）の空中庭園は屋上であり屋外であるが、バラペットによって景観が遮られ、ひとつの部屋のような空間である（cf., Le Corbusier et Pierre Jeanneret, *Œuvre complète 1929-1934*, op.cit, p.55.）。同じ景観構成をこのアパートマンの出窓は別の仕方で実現しているとも考えられる。

注35) 出窓の形式は後のユニテ・ダビタシオンの「ロジア」とはおそらく無関係ではない。食堂・居間とひとつながりのユニテ・ダビタシオンのロジアは、形式的には出窓であるが、外に出てくつろぐこともできるバルコニーでもある。

注36) cf., [Le Corbusier], FLC13545; [Le Corbusier], FLC13556; [Le Corbusier], FLC13541; [Le Corbusier], FLC13656; FLC13607; FLC13511; FLC13347; FLC13341; FLC13351.

注37) cf., [[Le Corbusier], FLC13711; [Le Corbusier], FLC13488; [Le Corbusier], FLC13769.

注38) cf., FLC13487; FLC13674; FLC13705; FLC13828; FLC13703; FLC13548; FLC13533; FLC13878; FLC13888; FLC 13380; FLC 13381. とりわけ出窓となる凸型のヴォリュームには室内から街路を眺める人間が描かれ、都市空間が室内化されて取り込まれ、生活空間の延長という観点から見ると、凸型の出窓は凹型の空中庭園と同じような機能を持っていることがわかる。cf., FLC13382; FLC13383; FLC13384.

注39) 図版出典：[Le Corbusier], FLC13656.

注40) 住まいを移す前に長年住んでいたジャコブ街のアパートマンでもやはり最上階の隠れ家的な場所にル・コルビュジエは好んで住んでいた。

注41) cf., FLC13365; FLC13366; FLC13367.

注42) ex., FLC8667; FLC8688.

注43) ex., FLC19900; FLC30549; FLC30627.

注44) 図版出典：FLC30549A.

注45) 図版出典：Le Corbusier et Pierre Jeanneret, Max Bill éd., *Œuvre complète 1934-1938*, Girsberger, Zürich, 1938, p.131.

注46) cf., Le Corbusier et Pierre Jeanneret, Max Bill éd., *Œuvre complète 1934-1938*, Girsberger, Zürich, 1938, p.131.

注47) cf., Le Corbusier et Pierre Jeanneret, *Œuvre complète 1910-1929*, op.cit., p.53.

注48) cf., [Pierre Jeanneret], FLC9277.

注49) 図版出典：[Le Corbusier], FLC13610.

注50) cf., [Le Corbusier], FLC13836C; [Le Corbusier], FLC13836D; [Le Corbusier], FLC13530; [Le Corbusier], FLC13735; [Le Corbusier], FLC13792; [Le Corbusier], FLC13780, 1932.6.21; [Le Corbusier], FLC13610.

注51) cf., [[Charlotte Perriand], FLC13531.

注52) cf., [Charlotte Perriand], FLC13812; [Charlotte Perriand], FLC13626; [Charlotte Perriand], FLC13529.

注53) cf., [Le Corbusier], FLC13760; [Le Corbusier], FLC13717; [Le Corbusier], FLC13634.

注54) cf., Le Corbusier, [Le Corbusier], FLC13823; [Le Corbusier], FLC13761; [Le Corbusier], FLC13762. しかしガラスブロック壁の多用は最初期からである。cf., [Charlotte Perriand], FLC13549.

注55) 図版出典：筆者作成

注56) 図版出典：[Le Corbusier], FLC13546.

注57) cf., [Le Corbusier], FLC13602; [Charlotte Perriand], FLC13779.

注58) cf., [Le Corbusier], FLC13544.

注59) cf., [Le Corbusier], FLC13836E; [Charlotte Perriand], FLC13771; [Charlotte Perriand], FLC13836B.

注60) この立方体の開口部は、西側の住居部分のヴォールトにも挿入され、居間に大きな採光が獲得されている。cf., [Le Corbusier], FLC13554; [Le Corbusier], FLC13522.

注61) 最終的には、側面はほとんどがガラス壁面の開口部となる。cf., FLC13774.

注62) cf., [Le Corbusier], FLC13546; Charlotte Perriand, FLC13499, 1932.7.7; [Charlotte Perriand], FLC13770; FLC13774; FLC13412.

注63) « C'est la clé du paradoxe. C'est un atelier de peinture et lorsque j'ai disposé du sol du 7e étage, où je suis, pour mettre dessus un toit et mettre mon atelier de peinture où je travaille le matin, je me suis aperçu que le nord je ne l'avais pas à cause de la disposition des lieux. J'allais faire un atelier n'ayant pas de lumière en hauteur parce que les gabarits de la ville m'interdisaient de les avoir et j'ai les lumières au contraire prenant du sol jusqu'à 2,20 mètres de hauteur, tout au long de l'atelier sur 12 mètres d'un côté et sur 7 mètres de l'autre. Ça va être une lumière épouvantable pour peindre, elle est changeante tout le temps, elle est d'est en ouest... Je crois qu'en fin de compte c'est excellent pour la peinture parce que la peinture livre la bataille des milles jeux différents ce qui est une bonne chose contrairement à la clé nord de Monsieur Caravage » (54: Le Corbusier, entretien radiophonique avec Robert Mallet, 1951, in Le Corbusier, entretiens avec Georges Charenso/ (1962) et Robert Mallet (1951), La Librairie sonore, Frémeaux & associés, 1987)

注64) cf., [Le Corbusier], FLC13616, 1932.6.21; [Le Corbusier], FLC13811; Charlotte Perriand, FLC13413, 1932.7.7; FLC13398; FLC13429; FLC13456; FLC13526.

注65) cf., Le Corbusier, W. Boesiger éd., *Œuvre complète 1938-1946*, op.cit, p.140. 実際には園芸会社の助言に従って慎重に樹木を選定している。cf, AFLC, H2-5-581, lettre de L. Crépin & H. Rogier à Pierre Jeanneret, 1934.4.10.

注66) 図版出典：[Le Corbusier], FLC13616, 1932.6.21.

注67) « Vrai reconfort.

Partie morale gagnée avec Yvonne. L'appartement lui a été présenté fini, rideaux, la plupart des meubles (nouveaux) après un bon déjeuner au premier étage chez Schniewindt. Elle était épatée, contente, mais faisait semblant de ne rien dire! C'était la première fois qu'elle faisait le voyage de Boulogne.

L'appartement est bien. C'était un péril pour moi d'aller habiter ma propre architecture. Au vrai, c'est magnifique. C'est une vue de pleine campagne avec aucune notion d'être perché au septième et huitième étage, grâce à des stratagèmes architecturaux. Pas de vertige ainsi. Le jardin un poème. Gazon, lilas, rosiers et autres et quel horizon! Une fameuse chambre d'amis. Pour toi mais il faut attendre que nous soyons installés. » (AFLC, lettre de Le Corbusier à sa mère, 1934,4,29)

注68) 図版出典：AFLC, L2-10-144.

注69) cf., [Le Corbusier], FLC13767; [Le Corbusier], FLC13631.

注70) cf., AFLC, L2-10-143. それは周囲の景観からは隔離されたパリのベイステギのアパートマン（1931）の極度に人工的に制御された空中庭園と形式的には類似している。違いは、植物の壁か、白色のコンクリートの壁か、であった。

注71) « Je suis obligé. À mon vif regret, de revenir sur la conservation que nous avons eue l'autre jour au sujet des jardinières que vous avez l'intention d'installer sur votre balcon : je vous prierai de bien vouloir faire poser ces jardinières au pied de votre vitrage, sur le sol même du balcon.

Nous avons été obligés de prier Madame DUCLOS d'enlever celles qu'elle vient d'installer sur son balcon. C'est une question de tenue de façade : les fleurs et verdure ne devant pas faire partie de la composition plastique et, d'autre part, la plupart des règlements interdisants plus ou moins l'installation de telles jardinières.

Je suis désolé de devoir contrarier ainsi votre projet, mais il vaut mieux s'expliquer trop tôt que trop tard. » (*AFLC, H2-6-589, lettre de Le Corbusier au Docteur BLUMENSTEIN*, 1934.4.23)

注72) cf., Charlotte Perriand, FLC13669, 1932.7.7; Charlotte Perriand, FLC13493, 1932.7.7; [Charlotte Perriand], FLC13772; FLC13412.

注73) ル・コルビュジェの自邸の入るアパートマンの構想当時、ル・コルビュジェは並行して、ヴァネールを巻き込みながら、パリのオスマン調の街並みに集合住宅を埋め込む構想を進めていた。ファベール通りの集合住宅（1932）、GB 集合住宅（1933）、デュボワ・エ・ルプー集合住宅（1934）、モンマルトルの集合住宅（1935）である。ル・コルビュジェのアパートマン以外はすべて鉄骨造であるが、すべてメゾネットの二層の住戸であり、モンマルトルの集合住宅を除くと最上階にはヴォールト屋根が載って、セットバック部分に緑化されている。とりわけヴォールト屋根に凹型の空中庭園が装備されているのはファベール通りの集合住宅（FLC12287; 12300; 12307; 12316）とデュボワ・エ・ルプー集合住宅（FLC18111）である。

注74) 図版出典 : [Le Corbusier], FLC13690.

注75) cf., [Le Corbusier], FLC13810; [Charlotte Perriand], FLC13798.

注76) cf., [Charlotte Perriand], FLC13532; Charlotte Perriand, FLC13426, 1932.7.7; [Charlotte Perriand], FLC13433; [Charlotte Perriand], FLC13573; Charlotte Perriand, FLC13842, 1932.7.7; Charlotte Perriand, FLC13876, 1932.7.7; Charlotte Perriand, FLC13659, 1932.7.7; FLC13445. 立面的にも、化粧台の間仕切壁の中央部を掻き取るという新しい方法も試み

られている。cf., [Charlotte Perriand], FLC13687.

注77) 図版出典 : [Le Corbusier], FLC13836A.

注78) cf., [Le Corbusier], FLC13542; [Charlotte Perriand], FLC13573; [Charlotte Perriand], FLC13574; [Charlotte Perriand], FLC13575; Charlotte Perriand, FLC18841, 1932.7.7; FLC13444; [Le Corbusier], FLC13836A.

注79) cf., Charlotte Perriand, *Une vie de création*, op.cit, p.56.

注80) cf., [Le Corbusier], FLC13836A. 寝室の領域については、とりわけ色彩について検討がされていたようであるが、検討を示す素描はほとんどない。cf., AFLC, H2-7-203.

注81) cf., [Le Corbusier], FLC13550, [1932].6.20 ; [Le Corbusier], FLC13690.

注82) cf., [Charlotte Perriand], FLC31996; [Charlotte Perriand], FLC13532; Charlotte Perriand, FLC13658; 1932.7.7.

注83) cf., [Le Corbusier], FLC13609.

注84) cf., FLC113532.

注85) ル・コルビュジェはこのアパートマンを構想している時期、1932年にスペインのマヨルカ島の民家の「一続きの大扉 une porte d'un seul tenant」にこの開閉手法を発見する。「一度に開く。これは素晴らしい S'ouvrant d'une fois, c'est digne」(Le Corbusier, *Le Corbusier Carnets 1 1914-1948*, Fondation Le Corbusier, Paris, The Architectural History Foundation, New York, Éditions Herscher / Dessain et Tolra, Paris, 1981, p.607)

注86) cf., [Charlotte Perriand], FLC13824; [Charlotte Perriand], FLC13784.

注87) [Charlotte Perriand], FLC13599. しかしニッチを検討するル・コルビュジェの素描はない。

(2025 年 4 月 30 日原稿受理, 2025 年 7 月 3 日採用決定)